様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：２４４０２
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１８４６８

研究課題名（和文）被災地芸能の二次創作に関する実践研究

研究課題名（英文）Practice based study of secondary creation of performing arts in disaster area

研究代表者
橋本　裕之（HASHIMOTO, Hiroyuki）

大阪市立大学・都市研究プラザ・都市研究プラザ特別研究員

研究者番号：７０２０８４６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は壊滅的な打撃を受けた地域社会の復興に際して、芸能が持つ特筆すべき力をフィールドワークによって実証した上で、震災に関する記憶の風化に抗する芸術文化協働のモデルとして、被災地芸能の二次創作という方法を検討した。芸能は東日本大震災直後の被災者を繋ぐ媒体として大きな役割をはたしたが、被災から10年近く経ち、関西は遠隔地ということもあり、震災を実感する機会がなくなってきた。そこで、岩手県上閉伊郡大槌町で活動している城山虎舞に触発されて、関西に在住するコンテンポラリーダンサーを中心とする阪神虎舞を立ち上げることによって、震災の記憶の風化に立ち向かうべく、虎舞の二次創作に関する実践研究を実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は文化財の保存と活用に限定されがちであった従来の文化実践を超えて、文化の真正性を問いなおして現代社会における文化の継承と創造を構想するという意味で、学術的意義をもっている。また、本研究は記憶の風化に抗する芸術文化協働のモデル構築をめざしている以上、その知恵を社会へ還元することが目的であり、記憶の風化を少しでも押しとどめる装置を開発することができたら、大きな社会的意義を獲得するはずである。東日本大震災は災害が過疎地を襲った際に支援する都市部の役割を再認識させた。災害の中心と周縁という課題に対峙する際、東北と関西を繋ぐチャンネルとしての芸能という視座は大きな可能性を示唆していると思われる。

研究成果の概要（英文）：This project demonstrated the remarkable power of performing arts in the reconstruction of a devastated local community through fieldwork, and as a model for the art-culture collaboration against the weathering of memories related to the earthquake disaster, considered a method called secondary creation of performing arts in disaster area. Although performing arts played a major role as a medium for connecting the victims of the Great East Japan Earthquake, nearly 10 years have passed since the disaster, and Kansai is a remote area, so there is no opportunity to experience the disaster. Therefore, in order to confront the weathering of memories of the earthquake, by inspiring Shiroyama Toramai, which is active in Otsuchi-cho, Kamihei-gun, Iwate Prefecture, this project conducted practice based study of secondary creation of Toramai through launching Hanshin Toramai centered on contemporary dancers living in Kansai.

研究分野：演劇学・民俗学(民俗芸能研究)

キーワード：被災地芸能　二次創作　記憶の風化　芸術文化協働　東日本大震災　城山虎舞　関西　移植

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

研究開始当初の先行研究と経緯を概説しておきたい。東日本大震災以降に芸能がコミュニティ復興に果たした役割はメディア等で頻繁に報じられており、周知の事実となっている。だが、研究者がその動向を十分に追い切れていないため、記録・資料等の散在状態は依然として解決していない。したがって、こうした情報を集約してデータベース化することが喫緊の課題である。岩手県についていえば、橋本も参加している『東日本大震災民俗文化財現況調査報告書　岩手県－Ⅰ・Ⅱ』（東日本大震災民俗文化財現況調査実行委員会、2012・2013）が基本的な文献であり、以降の動向は橋本裕之『震災と芸能――地域再生の原動力』（追手門学院大学出版会、2015 年）においてその一端を知ることができる。いずれも虎舞の動向に言及しているが、緊急的な現状報告にとどまっている。また、橋本が委員長を務めた大船渡市民俗芸能調査委員会が編集する『大船渡市民俗芸能調査報告書―祈りを舞う、暮らしを踊る―（本編）』（大船渡市郷土芸能活性化事業実行委員会、2016 年）においても、虎舞のもつ歴史的側面と民俗的側面をとりあげているが、大船渡市の事例が中心であり、東日本大震災以降の虎舞に関する活動は依然として十分に把握することができていない。したがって、その欠を補うことにまず注力することが求められた。

本研究に至った背景と経緯は、岩手県文化財保護審議会において無形民俗文化財を担当する委員を務めていた橋本が東日本大震災以降の岩手県沿岸部における芸能の被害に関する悉皆調査を行なうなかで、芸能を復興する意義を認識して、具体的な支援活動を起こしたことに発する。一方、橋本と中川は科研「芸能復興と被災地ツーリズム」において、岩手県普代村の鵜鳥神楽をとりあげながら、コミュニティ再興の一助として芸能を介した被災地ツーリズムの可能性を実践的に検証した。両名は科研に並行して各種のプロジェクトを立ち上げており、JTB とも連携して岩手県における被災地ツーリズムを実践研究として行なった。また、従来も鵜鳥神楽を関西にたびたび招聘しており、インドネシアへ派遣することも手掛けた。

だが、実物投入・直接介入型の研究および支援は、持続性という観点からすると大きな困難に直面する。当事者が暮らす地域社会における困難は、当然のことながらいまだ途にある復興が進展しないことが最大のものであるが、もうひとつに当事者以外の地域における記憶の風化がある。それは見えない形で被災地にのしかかってくる。そこで、被災地芸能を関西に常置することによって、上演する機会の増大や東北と関西の恒常的な関係の強化を図りたいと考えたのである。こうした構想を実現するべく、既に 2015 年度に大阪市立大学先端的都市研究拠点の先端的都市共同研究「記憶の風化に抗する芸術文化協働のモデル構築」を実施しており、城山虎舞のメンバー4 名を招聘して「虎舞フォーラム」を試行することによって、関西に虎舞を移植する二次創作の手法や想定される効果について討議した。本研究はこうしたアイデアを本格的に発展させたものである。

なお、本研究に先行する取り組みとして、国立民族学博物館で開催された大槌町の復興を扱った企画展の関連企画として、平成 29 年 3 月 19 日に城山虎舞が上演された。また、同日に阪神タイガースが必勝を祈願することで知られる兵庫県西宮市大社町の廣田神社、前日の 3 月 18 日にも張り子の虎が授与されることで知られる大阪市中央区道修町の少彦名神社などで奉納された。こうした機会を活用して、関西の人々が虎舞に接する機会を設けることによって、関西の人々に東北の芸能を継承していただき、自ら上演する気運を醸成した。

２．研究の目的

本研究の目的は、壊滅的な打撃を受けた地域社会の復興に際して、芸能のもつ特筆すべき力をフィールドワークによって実証した上で、その効果を持続させて震災に関する記憶の風化に抗する芸術文化協働のモデルとして、被災地芸能の二次創作という方法を実践的に検討、創案することにある。自然災害の多い日本では、過去の災害から得られた教訓や知恵を未来へ受け継いでいくことには大きな意味がある。それは遠くない将来、関東や東海、西日本で大きな地震が起こる可能性が高いという現実的な理由のほかに、災害の語りや日記、絵画といった知恵の継承に関わる文化実践の蓄積のなかに、新たな文化が創出される可能性があるからである。

本研究では遠隔地における記憶の風化という課題と向き合う。将来の南海トラフ大地震では最大 32 万人の死者が出ると予想されており、そのための防災の取り組みは活発に行なわれている。だが、ともすれば専門家の努力に委ねられて、東日本大震災ですら遠隔地、たとえば関西では徐々に他人事のように思われつつある。一方、関西では阪神大震災の記憶が受け継がれており、忘れられることはない。といっても、人口比率において震災未経験者の数が多くなってきており、記憶の継承については近い将来に深刻な壁に直面するだろう。今、こうした複数の大震災に関する記憶を繋ぎ合わせて、将来に向けた継承の技術を練磨することは重要な意味をもつ。本研究はそのような状況に対する危機感から立ち上げられた。単なる防災技術を超えて、記憶の風化を防ぐとともに、災後知から生まれる新たな文化的な仕組みを構築することが肝要であると考える。

芸能が東日本大震災直後の被災者を繋ぐ媒体として大きな役割を果たしたのは周知の通りである。芸能のもつ力が再認識されたといってもいいだろう。だが、被災から 10 年近くが経ち、関西は遠隔地ということもあって、震災を肌身で感じることもなくなってきた。したがって、関西の人々に東北の芸能を継承していただき、自ら上演することによって、震災の記憶の風化に「身をもって」立ち向かえるのではないかと考えたのである。そこで本研究では、芸能を媒介と

して風化に抗する文化実践のモデルを組み上げることを目的とする。フィールドとしては、東北から遠隔地である関西を選び、関西において東北の芸能の実践的な展開をはかり、それがいかに風化に対抗する文化実践になり得るかということを検証する。そのための実践的な方法論として、関西の人々が東北の芸能を学び、継承するという手法をとる。芸能をこうした目的で二次創作する試みは日本では類例がなく、全く新しい社会実験である。また、文化財の保存と活用に限定されがちであった従来の文化実践を超えて、文化の真正性を問いなおして現代社会における文化の継承と創造を構想することをもめざしている。そのために本研究に参加する研究者が芸能産業論、アーツマネジメント、文化財学、保存科学の分野において蓄積してきた専門的な知見を統合することが必須の課題であった。

実際は震災に関する記憶の風化に抗するため、東北文化の象徴ともいえる虎舞の一例である岩手県大槌町の城山虎舞をとりあげながらも、こうした虎舞を関西の風土のなかに移植する二次創作を実践する。城山虎舞は虎舞を愛する大槌町内の若者有志が平成 8 年に結成した最も新しい団体であり、東日本大震災によって大きな被害を受けたが、各種の支援を受けながら活動をいち早く再開した。復興を牽引するフロントランナーとして人々を力強く鼓舞してきたという意味で、その動きは注目されてきた。本研究では、まず虎舞のもつ歴史的側面と民俗的側面を実証的に把握するとともに、東日本大震災以降の虎舞に関する活動のデータベース化、情報集約とデータ分析を行なう。そして、記憶の風化に抗する方法の一助として虎舞を関西に移植する活動を実践的に検証して、被災地芸能の二次創作に関する方法論を提示する。なお、虎舞を選んだのは、パフォーマンスの圧倒的な魅力・技術の高さとともに、神楽のように宗教性に極端に引き寄せられていないこと、さらに城山虎舞が復興に対して積極的かつ進取的に関わってきたことが理由である。

そして、虎舞の二次創作に焦点をあてた芸能の役割を実証する作業を経て、次の段階における目的は、震災の記憶の風化に抗する芸術文化協働のモデル構築について明示的で実効性の高い計画を提示して、その試行的実施と評価という PDCA サイクルのなかで、芸能の二次創作に関する方法論を確立させることである。東北における伝統的な文化の継承に深刻な変容を与えることに十分な注意を払いつつも、関西において新しい災害文化を創造するための具体的な方策を検討する。そのための最適解を導き出すのが本研究の最終的な目的である。研究成果としては芸能の二次創作に関する先進的なモデルを提示することをめざしている。

３．研究の方法

本研究は、(a)地域社会の復興や再生に際して芸能のもつ力や役割を実証した上で、(b)被災地芸能の二次創作を試行して、その方法論を検討することになる。3 年計画のうち、当初は前者に重心を置き、東日本大震災以降の活動記録（文献、映像、メディア記事等）を集約するとともに、虎舞上演の企画・運営に当事者とともに関わり、記憶の風化に抗する効果などを検証する（アンケート分析、インパクト評価等）。ついで後者へ重心を移して、被災地芸能を関西に移植して二次創作を試行的に企画・運営して、その結果について評価等を行ない、記憶の風化に抗する芸術文化協働のモデル構築の可能性、方法等について検討・提案する。そして、将来的に虎舞を関西に根付かせるための各種の環境を整備する。また、研究成果をシンポジウム、論文集という形で世に問う。

研究体制を構成する４名は、橋本が科研「芸能復興と被災地ツーリズム」、中川が科研「芸術によるコミュニティ創出」、政岡が科研「東北地方における民俗の展開と東日本大震災」および科研「被災地における暮らしの再構築とその民俗的背景に関する調査研究」、日高が科研「東日本大震災で被災した民俗文化財の保存および活用に関する基礎研究」などの研究代表者を務めており、これまで東日本大震災以降の文化による復興研究に携わってきた。個々の成果は橋本裕之『震災と芸能――地域再生の原動力』（追手門学院大学出版会、2015 年）、中川真『アートの力』（和泉書院、2013 年）、日高真吾『災害と文化財――ある文化財科学者の視点から』（千里文化財団、2015 年）などに集成されている。また、政岡と日高は橋本が代表者を務めた国立民族学博物館の共同研究「災害復興における在来知」に参加しており、各人の成果が橋本裕之・林勲男編『災害文化の継承と創造』（臨川書店、2016 年）に収録されている。橋本は芸能産業論、中川はアーツマネジメント、政岡は文化財学、日高は保存科学の分野において第一人者であり、フィールドワークや実践的な活動、研究に関する卓越した成果をあげている。こうした 4 名が集結して蓄積してきた専門的な知見を統合することによって、本研究を高い水準で遂行することができる。

なお、橋本は関西の大学に研究拠点をもつが、岩手県文化財保護審議会委員を務めた経験をもち、現在も頻繁に関西と東北を往復しているため、被災地における芸能の活動状況を把握することができる立場にある。中川も関西の大学に研究拠点をもち、東日本大震災以降は橋本と連携して被災地における芸能に関する各種のプロジェクトを手がけてきた。社会包摂型アーツマネジメント研究の第一人者である。政岡は東北の大学に研究拠点をもち、東日本大震災によって大きな影響を受けた民俗文化の現状を調査する一方、長年にわたって関西でフィールドワークを行なっており、東北と関西を繋ぐ役割を果たすことができる。日高は東日本大震災によって被害を受けた民俗文化財の保存について大きな功績をあげている。また、国立民族学博物館で開催され

た企画展に城山虎舞を招聘した担当者でもあり、関西における虎舞上演の企画・運営に関わっているため、虎舞を関西に移植して二次創作する活動に対しても実践的な知見を提供することができる。

４．研究成果

平成 29 年度は城山虎舞を含めて被災地芸能のもつ歴史的側面と民俗的側面をとりあげた現地調査を各地で実施した。これは虎舞を関西に移植するための予備的な研究として位置づけられる。そして、城山虎舞に協力していただき、既に試行的なプロジェクトに着手していた虎舞の二次創作に向けて具体的な計画を策定しながら、その過程に関する参与観察的な調査を実施した。また、実際に関西において虎舞に関心をもち虎舞に参加していただける人材を確保するべく各方面に働きかけながら、その過程に関する参与観察的な調査を実施した。一方、東日本大震災以降に芸能がコミュニティ復興に果たした役割をとりあげた記録・資料等を集約する作業にも従事した。なお、メンバーによる研究会を 11 月に大阪で実施した。

平成 29 年度は予備的調査の段階であり、被災地芸能の二次創作に関して協力していただける城山虎舞のメンバーのみならず、実践的な性格を持つ本研究を応援していただける関係者とも打ち合わせを重ねながら、具体的な計画を策定する過程に関する参与観察的な調査を実施した。実際に関西において虎舞に関心をもち虎舞に参加していただける人材や団体を見つけることに苦労したが、ようやく目途がついたため、虎舞の二次創作を試行的に実施する手がかりを得ることができた。また、被災地芸能の現地調査を各地で実施することによって、被災地芸能の二次創作に関する積極的な意義と現実的な課題を確認することができた。一方、東日本大震災以降に芸能がコミュニティ復興に果たした役割をとりあげた記録・資料等を集約する作業は、現時点でほぼ集約することができたと考えている。

平成 30 年度は城山虎舞のメンバーを招聘してワークショップを実施する一方、数名の受講者を大槌まつりに派遣して現地の雰囲気を体感してもらった上で、関西に在住するコンテンポラリーダンサーを中心とする阪神虎舞の活動を開始した。これは既に試行的なプロジェクトに着手していた虎舞の二次創作に関する中心的な実践研究として位置づけられる。そして、城山虎舞にも協力していただき、虎舞を関西に移植するための具体的な計画を策定しながら、その過程に関する参与観察的な調査を実施した。また、平成 30 年度も平成 29 年度に続いて、城山虎舞を含めて被災地芸能のもつ歴史的側面と民俗的側面をとりあげた現地調査を各地で実施した。なお、メンバーによる研究会を 6 月と 11 月と 3 月に大阪で実施した。

平成 30 年度は本格的な実践研究の段階に入った。6 月に虎舞ワークショップ「Challenge 虎舞！」を開催した上で、9 月に数名の受講者を大槌まつりに派遣して城山虎舞に関する参与観察的な現地調査を実施した。そして、虎舞の二次創作を試行的に実施する手がかりとして、関西在住のコンテンポラリーダンサーを中心とする阪神虎舞の活動を開始することができた。実際は 11 月に城山虎舞の神戸公演「舞い虎参上、岩手大槌より」を開催したさい、その前座として阪神虎舞の初舞台が実現している。その反響は大きく、1 月にニューウェイヴガールズグループの大阪公演に参加する一方、3 月に少彦名神社の東北文化復興祈念祭―城山虎舞に導かれた阪神虎舞―において阪神虎舞を奉納した。いずれの機会においても被災地芸能の二次創作に関して協力していただける城山虎舞のメンバーのみならず、実践的な性格を持つ本研究を応援していただける関係者とも打ち合わせを重ねながら、具体的な活動を推進する過程に関する参与観察的な調査を実施した。また、平成 30 年度も平成 29 年度に続いて、被災地芸能の現地調査を各地で実施することによって、被災地芸能の二次創作に関する積極的な意義と現実的な課題を確認することができた。

平成 31 年度令和元年度も城山虎舞のメンバーを招聘してワークショップを実施する一方、数名の受講者を大槌まつりに派遣して城山虎舞に参加させてもらうなどして現地の雰囲気を体感した上で、関西に在住するコンテンポラリーダンサーを中心とする阪神虎舞の活動を継続的に実施した。これは既に試行的なプロジェクトに着手していた虎舞の二次創作に関する中心的な実践研究として位置づけられる。そして、城山虎舞にも協力していただき、虎舞を関西に移植するための具体的な計画を策定しながら、その過程に関する参与観察的な調査を実施した。また、平成 31 年度令和元年度も平成 30 年度に続いて、城山虎舞を含めて被災地芸能のもつ歴史的側面と民俗的側面をとりあげた現地調査を各地で実施した。なお、メンバーによる研究会を 6 月と 9 月と 11 月に大阪で実施した。

平成 31 年度令和元年度は平成 30 年度に本格的な実践研究の段階に入った本研究を飛躍的に発展させる段階に入った。4 月に廣田神社の天皇陛下御譲位御安泰祈願併春祭において阪神虎舞を奉納した。また、5 月に真陽南さくらグラウンドで開催された第 31 回真陽フェスティバルにおいて阪神虎舞を上演した。一方、6 月に城山虎舞のメンバーを招聘して虎舞ワークショップ「Challenge 虎舞！2019」を実施する一方、9 月に数名の受講者を大槌まつりに派遣して城山虎

舞に参加させてもらう稀有な機会を通して、城山虎舞に関する参与観察的な現地調査を実施した。こうした活動の経緯は読売テレビの『かんさい情報ネット ten.』において紹介された。そして、虎舞の二次創作を試行的に実施する手がかりとして、関西在住のコンテンポラリーダンサーを中心とする阪神虎舞の活動を継続することができた。

実際は以降も10月に若松公園多目的広場で開催された第16回輝け！集まれ！ながたっ子祭！、インテックス大阪で開催されたツーリズムEXPOジャパン2019、1月に五位の池小学校で開催された防災とんど焼きイベントにおいて阪神虎舞を披露した。いずれの機会においても被災地芸能の二次創作に関して協力していただける城山虎舞のメンバーのみならず、実践的な性格を持つ本研究を応援していただける関係者とも打ち合わせを重ねながら、具体的な活動を推進する過程に関する参与観察的な調査を実施した。また、平成31年度令和元年度も平成30年度に続いて、被災地芸能の現地調査を各地で実施することによって、被災地芸能の二次創作に関する積極的な意義と現実的な課題を確認することができた。阪神虎舞は 3 月以降もいくつかの神社で奉納することが予定されていたが、残念ながらコロナ禍によっていずれも中止された。阪神虎舞のメンバーもしばらく練習を自粛しているが、阪神虎舞の運営に当事者とともに関わり、その過程に関する参与観察的な調査のみならず、その結果に関するインパクト評価なども実施することによって、記憶の風化に抗する効果などを検証しているところである。

芸能をこうした目的で二次創作する試みは日本では類例がなく、全く新しい社会実験である。また、文化財の保存と活用に限定されがちであった従来の文化実践を超えて、文化の真正性を問いなおして現代社会における文化の継承と創造を構想するという意味で、挑戦的な意義をもっている。したがって、本研究のオリジナリティはきわめて高い。芸能の伝播に関する研究は古くからあり、高知から全国へ波及していったよさこいのような事例も見られるが、防災を視野に入れた試みはきわめて珍しい。当然ながら穏健な民俗芸能研究者などの反発を受けることが予想されるが、そこで生じる議論も本研究の射程内である。また、本研究は参加する研究者の専門性が芸能産業論、アーツマネジメント、文化財学、保存科学という多岐にわたっているため、学際的なアプローチを実現することができるという意味でも、挑戦的な意義をもっているはずである。それは文化の布置を擬似自然科学的な観察や分析によって把握するよりも、災害や忘却のような自然や人為に起因するマイナスの場のなかでプラスに転移させる、新しい文化生態学とでもいうべき人文科学を構築することにほかならない。

二次創作は通常サブカルチャーの諸領域において既存の作品を利用して二次的に創作された事物を意味しているが、本研究は文学理論における読者論や受容理論の成果を参照した上で、虎舞を関西に移植する活動を芸能の二次創作として理解する革新的な視座を提示しており、こうした視座自体も挑戦的な意義をもつ。本研究は記憶の風化に抗する芸術文化協働のモデル構築をめざしていることから、その知恵を広く社会へ還元することが目的であり、記憶の風化を少しでも押しとどめる装置を開発することができたら、挑戦的研究として大きな社会的意義を獲得すると考えている。東日本大震災は災害が過疎地を襲った際に支援する都市部の役割の大きさを再認識させた。記憶の風化も含めた災害の中心と周縁という課題に対峙する際、東北と関西を繋ぐチャンネルとしての芸能という視座は大きな可能性を示唆していると思われるのである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 橋本裕之	４．巻 12
２．論文標題 笑いながら舞う人―続・一人称の鵜鳥神楽―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 神戸女子大学古典芸能研究センター紀要	６．最初と最後の頁 101－111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 橋本裕之	４．巻 18
２．論文標題 神話の視覚化か視覚の神話化か―猿田彦と王の舞―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 万葉古代学研究年報	６．最初と最後の頁 51－68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 橋本裕之	４．巻 18
２．論文標題 論舞考	５．発行年 2020年
３．雑誌名 万葉古代学研究年報	６．最初と最後の頁 69－118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中川眞	４．巻 23
２．論文標題 大きな力と対峙するアーツマネジメント	５．発行年 2020年
３．雑誌名 空間・社会・地理思想	６．最初と最後の頁 207-213
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 政岡伸洋	4．巻 11
2．論文標題 沖永良部島の総合民俗調査について	5．発行年 2020年
3．雑誌名 アジア流域文化研究	6．最初と最後の頁 26-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 政岡伸洋	4．巻 54
2．論文標題 東日本大震災と「イエの継承・ムラの存続」―宮城県本吉郡南三陸町戸倉波伝谷の場合―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 年報村落社会研究	6．最初と最後の頁 145-190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 日高真吾	4．巻 214
2．論文標題 大規模災害時における文化財レスキューの課題	5．発行年 2019年
3．雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6．最初と最後の頁 47-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 政岡伸洋	4．巻 4
2．論文標題 宮城県波伝谷の地域文化を発見する―日本の民俗学からのアプローチ―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 新しい地域文化研究の可能性を求めて	6．最初と最後の頁 10-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 政岡伸洋	4．巻 4
2．論文標題 仙台における出初式と階子乗り―新聞記事からみた成立と戦前の展開―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日中韓周縁域の宗教文化	6．最初と最後の頁 45-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 日高真吾	4．巻 160
2．論文標題 日本における地域文化研究への新たなアプローチ	5．発行年 2018年
3．雑誌名 民博通信	6．最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計23件（うち招待講演　2件／うち国際学会　12件）

1．発表者名 橋本裕之
2．発表標題 あれを見よ、沖には沖にと見えしもの―鵜鳥神楽と陸中黒埼灯台―
3．学会等名 灯台文化価値創造スタディミーティング，日本財団
4．発表年 2019年

1．発表者名 Shin Nakagawa
2．発表標題 Gamelan activity in Osaka and its social context
3．学会等名 The Center for Pacific-Asia Music Research Seminar Series，台南芸術大学（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Shin Nakagawa
２．発表標題 Socially inclusive arts management in Japan
３．学会等名 MCH Special Seminar ‘Dialogue about Socially Inclusive Arts Management’, MCH Taipei Office（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Shin Nakagawa
２．発表標題 Reexamination of traditional performing as a key culturar resource for sustainable community; beyond dichotomy of urban vs. rural
３．学会等名 ICTM World Congress in Thailand, Chulalongkorn University（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Shin Nakagawa
２．発表標題 Bon odori：The most loved Japanese folk performing art
３．学会等名 Montaudio 19 Interpretacion, National Museum for Visual Arts（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Shin Nakagawa
２．発表標題 Socially Inclusive Arts Management as Social Engine in the Era of Post-colonialism
３．学会等名 Humboldt Conference in Dong-A University, Busan（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Shin Nakagawa
２．発表標題 Socially Engaged Arts Management and Community
３．学会等名 The 14th International Conference of Asian Arts Management in Cambodia（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 政岡伸洋
２．発表標題 民俗学の視点から湯殿山の即身仏を考える―出羽三山信仰の歴史的展開・北海道との関連にも注目して―
３．学会等名 東北学院大学文学部歴史学科市民公開講座（函館）
４．発表年 2019年

１．発表者名 日高真吾
２．発表標題 地域文化の宝箱の展望と課題
３．学会等名 第44回日本民具学会，桜美林大学
４．発表年 2019年

１．発表者名 日高真吾
２．発表標題 博物館の事前学習のための教育キット―地域文化の宝箱―
３．学会等名 国際フォーラム「地域文化を活用する―地域振興、地域活性に果たす役割―，蘭陽博物館
４．発表年 2019年

１．発表者名 Shin Nakagawa
２．発表標題 Empowering Arts and Cultural Organization
３．学会等名 The 17th Urban Research Forum in Yogyakarta（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Shin Nakagawa
２．発表標題 Local Dance Performance as a Cultural Heritage
３．学会等名 The 17th Urban Culture Research Forum（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 政岡伸洋
２．発表標題 地域を映し出す民俗学の可能性―東日本大震災の被災地との関わりから―
３．学会等名 民俗文化財の保存・活用入門（人間文化研究機構基幹研究「日本列島における地域文化の再発見とその表彰システムの構築」）
４．発表年 2018年

１．発表者名 政岡伸洋
２．発表標題 民俗行事から何が見えるのか？―チャグチャグ馬コの事例から―
３．学会等名 第33回「子どもの将来を考えるみんなの集い」
４．発表年 2019年

１．発表者名 政岡伸洋
２．発表標題 民俗学は部落問題といかに向き合ってきたのか―研究史の整理と今後の課題―
３．学会等名 部落解放・人権研究所第一研究部門（「部落史の調査研究」）第29回公開講座
４．発表年 2019年

１．発表者名 日高真吾
２．発表標題 地域文化の保存を考える
３．学会等名 国際フォーラム「地域文化を保存する－実践者の視点から」
４．発表年 2018年

１．発表者名 Shingo Hidaka
２．発表標題 Cultural property rescue activities during the Great East Japan Earthquake
３．学会等名 International Anthropology Workshop Disaster Perceptions and Responses in Times of Global Upheaval（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 日高真吾
２．発表標題 日本における被災文化財の保存と活用について
３．学会等名 日本・エクアドル外交関係樹立100周年記念国際シンポジウム「文化遺産とは何か：エクアドルと日本の自然災害を通して考える」
４．発表年 2018年

１．発表者名 Shin Nakagawa
２．発表標題 The Role of Universities in Urban Community Regeneration
３．学会等名 The third Conference of IUC: The University as Urban Cultural and Social Engine（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 中川真
２．発表標題 社会空間としてのアート空間
３．学会等名 第12回アジア・アーツマネジメント会議
４．発表年 2017年

１．発表者名 Shin Nakagawa
２．発表標題 About Education for Creative and Responsive Citizenship
３．学会等名 The 16th Urban Culture Research Forum（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Shin Nakagawa
２．発表標題 Contesting Social Space in Urban Context: Toward the Third
３．学会等名 The 16th Urban Research Forum in Yogyakarta（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 政岡伸洋
２．発表標題 東日本大震災と「イエの継承・ムラの存続」－宮城県本吉郡南三陸町戸倉波伝谷の場合－
３．学会等名 日本村落研究学会第65回大会（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計11件

１．著者名 日髙真吾	４．発行年 2019年
２．出版社 国立民族学博物館日髙真吾研究室	５．総ページ数 242(14)
３．書名 地域文化を保存する－実践者の視点から（地域文化の保存を考える－日本の視点）	

１．著者名 橋本裕之	４．発行年 2019年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 307（２０）
３．書名 日本の舞台芸術における身体―死と生、人形と人工体―	

１．著者名 橋本裕之	４．発行年 2019年
２．出版社 特定非営利活動法人ACT・JT	５．総ページ数 23
３．書名 伊豆地域郷土芸能現状調査報告書～伊豆のODORIKOフェスティバルに付随して～	

１．著者名 Nobuhiro MASAOKA	４．発行年 2018年
２．出版社 Waxmann Verlag GmbH	５．総ページ数 416(21)
３．書名 Themen und Tendenzen der Deutschen und Japanischen Volkskunde im Austausch	

１．著者名 政岡伸洋	４．発行年 2018年
２．出版社 山東大学出版社	５．総ページ数 363（35）
３．書名 民俗、文化的資源化　以21世紀日本為例	

１．著者名 日髙真吾（編著）	４．発行年 2018年
２．出版社 国立民族学博物館 日髙真吾研究室	５．総ページ数 227
３．書名 地域文化の再発見―大学・博物館の視点から	

１．著者名 橋本裕之	４．発行年 2017年
２．出版社 臨川書店	５．総ページ数 543
３．書名 王の舞の演劇学的研究	

1．著者名 橋本裕之	4．発行年 2017年
2．出版社 臨川書店	5．総ページ数 366(27)
3．書名 文明史の中の文化遺産（蠅としての民俗学者―無形文化遺産におけるよそ者の役割―）	

1．著者名 橋本裕之（監修・執筆）	4．発行年 2017年
2．出版社 福井県里山里海湖研究所	5．総ページ数 119（14）
3．書名 明日の例大祭を考える―福井県三方郡美浜町の彌美神社例大祭をめぐる活動記録―	

1．著者名 政岡伸洋（監修・執筆）	4．発行年 2018年
2．出版社 東北歴史博物館	5．総ページ数 199（15）
3．書名 新沼の民俗―宮城県大崎硬度における暮らしの諸相―（地域の概要・本報告書の総括として）	

1．著者名 日高真吾	4．発行年 2017年
2．出版社 臨川書店	5．総ページ数 398（22）
3．書名 文化遺産と生きる（地域文化遺産の継承）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	中川　眞 (NAKAGAWA Shin) (40135637)	大阪市立大学・都市研究プラザ・特任教授 (24402)	
研究分担者	政岡　伸洋 (MASAOKA Noburiro) (60352085)	東北学院大学・文学部・教授 (31302)	
研究分担者	日高　真吾 (HIDAKA Shingo) (40270772)	国立民族学博物館・人類基礎理論研究部・教授 (64401)	